

---

# 幸福の価値は

八神智和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸福の価値は

### 【Nコード】

N7431Q

### 【作者名】

八神智和

### 【あらすじ】

とある田舎町の物語。

連続殺人事件に騒がれるその町で少年が出会うのは過去を失ってしまった少女だった。

その出会いは衝撃的だった。

なにせ、少年と少女の出会い、一つの殺人事件、いや一つの殺戮事件の現場だったのだから。

これは、何かを胸に秘める一人の少年、水野景と、精神が壊れてしまった少女、榊愛の二人が描く、一つの物語……

~~~~~多分にして『嘘つきみーくんと壊れたまーちゃん』に影響を受けている作品となっております。ご注意ください~~~~~

## 序章

過去と現在の違いとは何だろう。

過去はすでに起こったことで、現在は今の現状。これが模範的な解答だろうか。

なら未来は？

未来の明確な解答は？

今から起こることが未来？

それとも、誰かが想像したのが未来？

未来は変えられるとよく言うけれど、それって未来が決まってるってこと？

私は、未来がわからない。想像し、思慮し、思考し、熟考し、苦悩しても、解答にはいたらない。

未来ってなに？

一秒後？ 一分後？ 一時間後？ 一日後？ 一年後？ 一世紀後？

先生に聞いてみると後々に起こる不確定なことはすべて未来だと言ってもいいのだと。

じゃあ、一秒後は未来じゃない？ ドッチボールで自分に向かって飛んできたボールを避けられないと理解して当たるのは未来とはなりえない？

五時に放映されるテレビ番組が予定通り放映されるのは未来ではない？

じゃあ、それらはいったい何に区分されるのだろうか。

過去、なわけがない。

現在、なわけがない。

未来、というのはさっき否定されたばかりだ。  
ならば、なに？

納得するだけなら簡単だ。

未来には二種類あり、何が起こるかわかる未来と、何が起こるかわからない未来があると自分に言い聞かせればいい。

けれど、私の歪んだ心理状況はそれを良しとしない。

ただ割り切れれば解決することなのに、解答を求めようとする。

それはやはり、私が壊れているから、そうなるのだろう。

私には過去がない。正確にいうと、過去にそれほどの価値を見出していない。

興味がない。いわゆる、無駄なものと判断している。

私は、経験を蓄積できないから。

私には、現在と未来しかない。だというのに、二つしかないものの一つが理解できない。

そして、私に残されたのは現在という一つの真実。

今の、瞬間の、刹那の、この時間。

私は、生を実感できる。

「あら、ダメじゃない……」

足元で蠢くものを、容赦なく踏み潰す。

ぎい、と卑屈な泣き声を辺りに撒き散らし、ぶしゅつ　と血が噴き出す。

ぴとり、と。

顔についてしまった血を左手で拭い、溶けに溶けたチョコレートのようなソレを指先で糸を引かせて弄ぶ。

ああ、　私は今を生きてる。

右手に握る獲物を赤く湿らせて、私はそう実感した。

足元に血だまりができている、その場所で。

月明かりが溶けるように、その姿を際立たせて。

『バカじゃねえのかお前？』

反射的に言ったかのような軽い暴言に、僕は眉をひそめる。

「バカとはなんだ。学生の身分である勉強を忘れない、至極真つ当な行動だと僕は自負している」

『何をまたバカらしいことを……、』

電話の相手である渋谷に僕の長くから暖めていた『一生に一度は言ってみたい台詞』を何の悪ぶれもみせずと言ったのけると、そう反応された。

渋谷のため息をつく音が耳に当てている携帯電話から流れ出す。溜めに溜めた大きなため息は僕の眉間に皺をよせる理由には十分すぎた。

「なんだよその反応は。僕がそんなにバカに思えるのか」

『ああ、思えるね。この頃、連続して町で殺人が起きてるつのに、徒歩でコンビニにレポート用紙を買いに行くヤツは十分なバカか、自殺願望者のどちらかしかない』

渋谷の言葉に僕はぐうの音もでなかった。深夜徘徊の現行犯である僕は、今現在コンビニの帰り道を歩きながら友人と通話していた。

「今、コンビニに居るが、渋谷は何か買ってきて欲しいものとかあるか？」と、隣の家に住む渋谷にメールしてみたら即座に電話がかかってきて、いきなり説教された。

むう、面倒なヤツめ。たった徒歩三十分のところにあるコンビニに出て何か不都合なことがあるわけでもなし。

『あるだろ。隣人がいきなり死んだら俺の目覚めが悪くなるってーの』

「ああ、そうか。しかし、渋谷のためにコンビニに行くなど言われたら僕は意地でも家から飛び出ただろうね」

だけど面倒だから、すぐに家に戻ってくるんだろうなあ。

うーん。僕は本当に面倒な心の作りをしているな。天邪鬼といふかなんというか、意地悪なものである。

「ていうか渋谷。今何時だかわかる？ 僕時計を家に置いて来ちゃ

って」

『携帯見るよ』

「お前との通話に使ってる」

『画面見れば時間くらいはわかるだろ』

「あいにくと僕の携帯はそこまで最先端を取り入れていないんだ」

旧世代の遺物だと言っても過言ではないのだ。嘘だけど。

『ったく。ちよっと待ってる』と、携帯の向こうからガサゴソと何かを取り出すような音がする。

ふうむ。どうやら一瞥して時計が見えるような部屋の状況ではないらしい。つい最近掃除していた気がするがその努力はいつたいに消えたのやら。

周りが畑だらけの風景に、山の周囲をぐるりと回る一つの登り坂が見えた。

コンクリートで舗装されていない、土の道は現代人からみれば遅れるの一言で片付けられるそれは僕の家へと続く一本道である。

そこへ一歩踏み出し、レポート用紙と共に買った付属品の重さのかかるレジ袋が気になり始めた右手と携帯を持つ左手の持つものをチェンジし、僕は改めて携帯を耳に押し付ける。

『おお、あつたあつた。ったくこんなところにあるとは誰も想像つかねえよ』

「自分で片付けたんだろうが」

『俺の工口本。やっと見つけたぜ』  
ぶちっ。

あ、しまった通話切っちゃった。まあいいか、特に話さなくちゃいけないようなこととかないし。

とりあえず、携帯で現在時間をチェックしてから、己のポケットの中に突っ込んだ。

深夜一時。こんな時間に近所の悪がきがしゃしゃり出てくるわけもなく、辺りは沈黙に包まれていた。

等間隔に置かれた電柱と明かりだけで道すべてを照らすことなど

できるわけもなく、僕の足元は時折見えなくなる。

もーまっくら。お先は真っ暗ひー怖いね。

そこに不安はないし、不満もない。けど、ほんの一抹の恐怖はある。

数週間前から起きた連続殺人事件。いや、起きたじゃない。今もなお起こっている連続殺人事件、というのが正しいか。それとこれとは意味がぜんぜん違う。

テスト一週間前か二週間前くらいに違う。この例え自体違うけど。現在進行形での殺人犯の存在。昨日で確か五人は死んでいたはずだ。どれもこれも深夜の時間帯で、いい感じに解体されてたのと。と。

犯罪心理学のスペシャリストの井上（有上だったも）さんが『これは娯楽殺人ですね』と神妙な顔で頷いていたのを覚えている。

……………違うなあ。

殺人や殺戮に理由を求めるってのは、間違ってる。

それらはもつとシンプルにあるべきだ。殺したいから、殺す。それ以外に殺人を表す言葉があるのかな。

よく殺したくて殺したわけじゃないといったものを聞くけど、それは殺人じゃなくて事故に分類したほうがいい。

そして、似てるけれど、殺人と殺戮は違う。

殺人は確固たる目的があつての人殺しで、殺戮はなんの意味も理由もない人殺し。殺害という行為に人に対する感情があるかないか。殺さなくてはならない人がいるかないか。

それが殺人と殺戮の明確な違いだ。

と、僕の理論を展開してみたけど、反論は随時受け付ける。

僕の考えが絶対に正しいという確信も覚悟もないから、反論されたらそれまでだろうけど。言い返すのなんて面倒だからね。

けど、僕の理論で考えてみて、今回の犯人は殺戮と殺人のどちらを行っているんだろ。

殺された五人には接点がないっていうから、殺戮でいいとは思う



けど。うー。なんか考えるの面倒だ。

けれど、家へ帰るまですることがない。足を動かす意外に何か面白いことはないだろうか。

あ、UFOだぜフー！！とか叫んでもいいけれど、それではただの変態なので自重する。

あ、ケンケンとかはパスね。暇を持て余したの理由にケンケンをして足の骨を折ったら笑い話にもならない。

そんなことはないと思うけど、念には念をだ。と、面倒だからしないという行動に後付けで理由を付け足してみる。

我ながら悲しい作業だ。

こんなことなら渋谷との通話を切らなければよかった。

だからといって、もう一度かけ直すのもなんとなくはばかりだし、この暇な時間をどうするべきか。

とりあえず、家へ帰る時間の短縮のために走ることにした。

足に少し力を入れ、次に踏み出す一步目の歩幅を大きくする。それを繰り返して、僕の足が安定した一定運動を開始した。

直後、暗がりには潜む石に足をひっかけ、僕の顔面が土汚れの道へスライディング。

痛い。予想以上の痛さに、僕は歩く気力を失いそうだ。

手足に力を入れ、自分の身体を起こす。

その後、足の裏からロケット噴射で空を飛び家へと向かってもいいのだけれど、それだとただのロボットなので自重する。できないけど。

立ち上がり、服についた砂を払ってから僕は再び歩き出す。

この転んだ借りは渋谷に支払わせる、と心に決めて、それを実行した時のことを想像して思わず笑みがこぼれる。

けれど、そんな僕の表情はすぐに消えることとなる。

視界の端に、何かが映った。

木とは違う、何かの生き物が蠢いていた。

月明かりと、心もとない電灯が照らす道の向こう。正確には僕の

向かう道の右にある一つの公園。

月に、雲がかかる。

最初に気づいたのは、言いようの無い強烈な臭いだった。  
鉄くさい、とでもいうのだろうか。

その臭いを辿り、僕は公園の入り口をくぐり、その中へと侵入する。

次に気づいたのは人影。あまりの暗さに影も出来ないその中で、  
一人の女性が公園のど真ん中で立ち止まっていた。

歩く速度が、自然と減少する。ゆつくりと、しかし確実にそこへ  
近づいていく僕の足は、その女性の顔が判別できるほどに近づいた  
ときには完全に止まっていた。

そして、月にかかった雲が身を引き、月光が辺りを照らす。  
最後に気づいたのは、死体。僕の足元に広がる、溜まりに溜まっ  
た水溜り。赤く染まった、水溜り。

死体が事切れてまだそんなに時間が経っていないのか、その身体  
は時々ピクリと痙攣していた。

そして、その血溜まりの中心に佇む、一人の女性。

「あら……、」

女性が僕に初めて気づいたかのように目を向けた。彼女の右手に  
持つ、赤く染まりきった果物ナイフが月明かりに反射してちらりと  
光る。

「こんばんは。良い、夜ですね」

綺麗な女性、いや少女だった。年齢は僕と同じか少し上くらいだ  
ろうか。綺麗な黒髪が肩と腰の中間辺りまで伸びて風に揺れている。  
不純で、不潔で、不条理で、不謹慎で、不真面目で、不可思議で

純粋な少女の笑顔だった。

そんな綺麗な綺麗な綺麗な少女の顔は、飛び散った血が所々に付  
着していた。

その顔には、見覚えがある。………そうか、そうだったのか。  
いや、今はそれどころではない。感慨に耽っている場合ではない。

僕は会ってしまったのだ。殺戮を目的とした殺人鬼、その人に。  
そして。

これが僕、水野<sup>みずの</sup>景<sup>けい</sup>と少女、榊<sup>さかき</sup>愛<sup>あい</sup>の初めての出会いだった。

The event was a memorable  
night for me. } } Introduction to  
the story of the story } }

## 序章（後書き）

この作品ではすべてを一人称にして書いていこうと思います

慣れない事なので、お恥ずかしい間違いをお見せするかもしれませんが、少しでも楽しんでいただけたらうれしいです

可愛さ余って憎さ百倍

？

## 序章 1

きた。

覚悟はしていたけれど、きちんとやりきれんのだろうか。  
一年前に決着を。

僕の決意を、罪を、人生を。それらすべてをかけて、全力で。  
それがキミとの約束だからね、愛。

久しぶりに学校に行くことにしました。

近頃、私にとって良いことがあったようで、気分がすこぶるよかつたからだろう。

「行つてきます……」

誰からの返事もない家にそう告げて私は玄関を閉める。朝陽を反射した窓ガラスが、私を学校へと送り出す。

ああ……良い気分。朝早い時間帯は空気が美味しく感じますよね。けれど、私のそんな陽気な気分は次の瞬間、モノの見事に憂鬱へと変わる。

「おはよう。今日はきちんと学校に行くんだね、さかき榊さん」

私の家の前に植えてある樹齡ウン十年の木に背を預けて、こちらを一人の男が見据えていた。

……鬱陶しい。私は、そんな感情を隠そうともせずに、彼の横を抜けて、学校へ足を向ける。

知りもしない男に付き合っでやる時間を、私は持ち合わせはいません。

しかし、どうやら彼は人の機嫌をうかがうということを知らないようで、無神経にも私の隣に並ぶように歩き始める。

……思わず、男の鼻っ柱に一発入れたくなりました。

「……………何の用ですか？」

「いやね、この頃学校に来てないから心配だなあ……ってね」

「それで、わざわざ住所を調べて、朝早くから家の前で待っていたんですか」

「そうだよ」

「……………」

「というのは冗談で。前に僕と一緒に遊んだことがあるんだけど、覚えてない？」

「覚えてません。これでも私、記憶力は良いほうなのでアナタとは過去に一度も話したことはないと言言できますよ」

「正解」

人をおちよくってるんでしょうか。何が目的かはだいたい予想はつくけれど、何がしたいのかわりません。

けれど、一つだけわかった。目の前のコイツは信用してはいけないヤツです。

「実はね、僕は榊さんに興味があるんだ」

「私はありません。すぐさまに私の視界から消えてください」

「つれないね。結構本気だったんだけど」

「問題ありません。あなたの本気という言葉を信頼できないだけですから」

正解。

そう言っで、男は薄っぺらい笑みを顔に貼り付けた。そんな万人受けしそうな笑顔の中にある悪意を何人の人間が理解できるのだろうか。

理解したところで、私には興味はないですけど。

学校へと続く、長くて広い一本道。その入り口に差し掛かって  
もなお着いてくる男に、私は内心舌打ちしながら、不意に、といっ  
た風に話しかけた。

「どこまで着いてくるおつもりですか？」

「どこまでも」

「ストーカーです。警察に訴えますよ」

「警察より先に先生に相談することをオススメするよ」

結局。

どこまでも、と答えた彼は本当にどこまでもついてきた。

さすがに、私のクラスの教室まで入ってきた時には咎めようと思  
ったが、『いやさ、僕も同じクラスなんだよね』と先に釘を刺され  
たので私の機嫌の悪さは留まるところを知らない。

さて、どこまで私は不機嫌になれるのか見物ですね。私はいまだ  
に自分の憎悪の限界を知りませんから。

記憶を頼りに、私は一番後ろの窓側の席の一個隣の席へと腰を下  
ろす。椅子がもたらす冷たい感触が、私の気分をいささかクールダ  
ウンさせた。

椅子にクールダウンさせられる私の機嫌はどれほどに適当なもの  
なのでしょう。

自分で、そう思った。

「榊さん。そこ、席が違うよ」

「……………」

またこの男に気分を害された。慰謝料を請求したい気分です。

クールダウンした瞬間に話しかけてくるなんて、この男はそのタ  
イミングをはかってでもいるのだろうか。

「席替えでもしたんですか？」

「ちょうど昨日ね。実は、一週間学校を休んでいた榊さんには席替  
えのことがわからないだろうと思って、家まで行って伝えようと思  
ってたんだ」

「ダウト」

「正解」

男が、私の座る左隣の席、すなわち窓際の一番後ろの席を指差す。思わず嘆息して、私は指差された席へと移動して腰を下ろし、頬杖をついて外を見た。

そんな私の隣の席に、男は座った。自分のバックを席の荷物掛けに置いたということは、そこが男の席なのだろう。

……嫌な席。窓際の一番後ろだというのに、ちっとも授業中に気を休めそうに無い。

「ねえ、榊さん」

「……………」

「右の頬に、ご飯粒がついてる」

「……………」

ダウト、と言ってやらないのは私がこれ以上目の前の男と話をしたくないという無言の訴えのつもりだった。

私は、学校で誰かと会話する気はありませんから。特に、私に好んで近づいてくる人とは。

「……………」

男は仕方ない、とでも言いたそうな表情で私の耳元へと唇をよせて、小さく呟いた。

「愛」

「ッ！！？？」

思わず。

そんな一言だけで、今している行動を言い表すことが出来るのは、それほどまでに私の行動がシンプルだったからだろう。



シンプルで、純粹で、真っ直ぐ。それでいて力強い行動は、男の胸倉を掴んで強引に引き寄せ耳元で小さく用件をささやくというものであった。

「私とお友達になりたいなら、屋上でお話ししましょう?」

「いいね。屋上で愛を確かめあう二人。なんてドラマチック」

「気持ちの悪い言葉を吐かないでください、怒りますよ?」

「それは悪かった。謝るよ、誠心誠意ね」

「言葉ではなんとでも言えます」

胸倉を掴んでいた手を離すと、男はゆっくりと自分の椅子へと腰を下ろした。

あの椅子に爆弾でも仕掛けてあつて死ねばいいのに。

制服の襟を正しながらこちらを見る男を見て、そう思った。

「やつぱり、気に障った?」

「当たり前です。初めて会った男性から下の名前で呼ばれて嫌がない女はいません」

「居るかもしれないよ?」

「居たとして、それは私ではありません」

「じゃあ、なんて呼べばいい?」

「なんとでも呼べばいいじゃないですか」

「矛盾してるね。そんなことを言われたら僕はキミのことを愛とか呼べなくなっちゃうじゃないか」

「いいですよ、別に。アナタには何を言っても無駄だとわかりましたから」

「男子は誰でも猪突猛進なのだよ」

ダウト、と私は言わなかった。

ニコニコと、したり顔の男の……あ、そういえば、まだ名前を聞いてなかった。

名前も知らない男に下の名前を呼ばれるのは、少しばかり抵抗がある。

呼ばれること自体にも、抵抗はありますけど。

「ねえ、アナタ…名前は？」

「ん？ ああ、そういえば今回はまだ言っていなかったね」

水野、と男は名乗った。

フルネームは水野景。

どうにも聞き覚えがある名前だった。

どこだったかなあ……… まあクラスメイトですし、いつか聞いたのかもしれない。

「よろしく」

「ええ。よろしく願います、けーくん」

私の軽口に、水野は珍しく（そう言えるほどには知り合って時間もたっていないが）目を見開いた。

可愛さ余って憎さ百倍

？

授業をサボって屋上に行くなんて、なんか青春の臭いがするよね  
！！

そんな僕の意見をアイに伝えると、呆れ顔で『そうですね』と同意された。

屋上へと続く階段の途中。

ふざけた問いにもきちんと答えてくれるとこが彼女の良い所だ、と僕の心のろ過装置が彼女の悪意だけを取り除いてポジティブに言葉を受け取る。

まあ、自分でポジティブって自覚してたら何の心の防壁にもなりはしないけど。

無自覚なポジティブこそが、絶対的な心の防御なのだ。

「ねえ、アイ」

「どうしたんです、けーくん？」

その呼び方やめてくれない？ とは言えなかった。

僕は彼女の嫌がつてる「アイ」って言葉で呼んでるし、自分だけ都合の良いように何事も進まないのが人生だ。

……ただ、僕が彼女を「アイ」と呼ばなければいい話なのだけけれど、それはお断りしたい。

「なんで授業をサボってまで屋上で話さなくちゃいけないのかな？  
放課後とか休み時間とかでもいいだろうに」

「けーくんと一緒に居るところを他の人に見られたくないからです  
あっちゃー。照れ屋さんだ。

本日二回目のポジティブバリア展開の瞬間である。

「それとさ、屋上に行くのはいいんだけど鍵かかっているんじゃないの？」

「それについては問題ありません。私、鍵持ってますから」

「さっきからジャラジャラなってるその鍵束の中に屋上の鍵がある

ってこと？」

「ああ、ちゃんと目はついてたんですね。この束を見て何も言っ  
てなかったのが目が見えなくなっているのかと思いました」

あまりの衝撃に突っ込めなかったんだボケ。

大きなリングに三〇個くらいの鍵が通ってあつたら誰でも引くぜ、  
という意見に僕は多くの賛成案を求めます。

もちろん、賛成数は一であり、それ以上にもそれ以下にもならな  
かった。

しかし、否定案もないのでこれは議決では？

「まあ、この鍵の数が常軌を逸していることなんてとつくの昔に自  
覚してますけど」

予想外。意外なところからの助けで、なんと賛成数が二となった。  
過半数どころかすべての票が僕の意見の元へと集まったわけだ。

こりゃあ、文句なしの大勝利だぜ。はっはっは。もちろん、何の  
意味もないんだけどね。

「つきましたよ、屋上。けーくんの大好きな男女一人ずつしかいな  
い密室状態まであと少しですね」

「女の子がはしたないこと言うもんじゃありません」

「ふふ、はしたないことをけーくんが想像するから言葉がはしたな  
く聞こえるんですよ」

「さっきから、言葉が辛辣すぎない？」

「私は、自分の名前が嫌いですから。忘れよう忘れようと努力して  
る私に、名前を思い出させてくれて、けーくんには感謝してもしき  
れませんよ」

無機質な笑顔の隅々に、憎々しさをかもし出して僕を見る。それ  
は僕の発言に謝罪をするのではなく『お互い様だ』と発言している  
にすぎない。

笑顔の裏に潜むものは誰とも問わず嫌らしいものである。僕も含  
め、ね。

ていうか、笑顔どころか言葉の端々にも悪意があることに今更気

づいた。榊アイ、おそろしい子。

屋上のドアの前まで来ると、アイは無表情なままで数十もある鍵の中から迷いもせず一本の鍵を取り、鍵穴へと差し込む。

しかし、そのまま鍵を回すことはせずアイは僕の方へと身体を向けてニコリともせず言葉を投げる。

「そろそろ教えてくれませんか？」

「いいよ」

その質問の内容を確認せずに即答する。

世界の真理、人間の裏歴史、政府の実態、密輸入の現場、友達の作り方、栄養素の効率的なとり方、誰かの秘密、聞かれたことには全部答えようじゃないか。

もちろん、答えたこと全部が正解だとは限らないけど。

必要があるのなら嘘でも平気でつく予定です。

嘘はいけないなんて言葉を僕が口にすることは生涯一生ありえないだろうね。

そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、アイは口を開いた。

「アナタの目的は？」

「友達になりたい」

「アナタの今の気持ちは？」

「超緊張してる」

「アナタの趣味は？」

「人間観察」

「アナタの好きなものは？」

「冗談」

「アナタの座右の銘は？」

「口は災いの元」

「アナタの出身国は？」

「アイヌ」

「まさかアイヌ人だったとは御見それします」

「いやいやお気になさらず。僕はアイヌ人としては出来損ないだから」

ら、一族から追放された身なんだ」

「追放されたんですか。それは大変ですね。日本にはいつまで？  
もしかしてビザの更新が出来ずに不法滞在とか」

「それが危ないんだよね。この前もギリギリでビザを更新できたけどさ、あと少しで日本を追い出されるところだった」

「相当デンジャラスな生活を送っているんですね。何かお手伝いできることがあっても私は手伝いません」

「結構だよ。僕は僕だけで生きていける」

「独立できているんですね。羨ましい。私はまだ親にすがってばかりです」

「居もしない親にすぎるなんて、器用なマネをするんだね」

「心の中の両親に、って意味です」

「家族の絆が強かったんだね。別れてもなおその繋がりの強さは驚嘆に値するよ」

「ホント、自慢の家族でしたよ」

二人して、オホホホホとどっかのおばさんのように笑う。今回の会話のネタをつまみに他の人との会話を弾ませそうだ。プライバシーは守れよプライバシーは。

アイは、今の会話で何か納得したのかほんの少しだけ表情を緩めて、屋上のドアへと身体を向けなおし取っ手を回して扉を開ける。

屋上へと足を踏み入れながらダンスでターンするようにステップを刻みながら彼女は振り返り、含み笑いを口元に刻んで自嘲気味に呟いた。

「さて、二人の二人による二人にとって二人のための尋問大会を始めましょう」

彼女の素敵なお誘いを、僕は屋上に足を踏み入れることによって答えた。

二人とも尋問係だったら意味がなくないかい？　なんて言って不機嫌になれるのだけは絶対に防がなければならなかった。

可愛さ余って憎さ百倍

？

屋上って素敵ですよ。誰もいなくて、何もないから。

誰かとの接触が苦手な私はそんな美的素敵快適空間を大事に思っています。

一人は楽なんです。何も背負わなくていいから。

「さて、ではまずはけーくんの聞きたいことからしましょうか」

屋上のふちの小さな出っ張りに腰をかけ、そこそこ新しいフェンスに背を預ける水野くんはちらりとこちらを見る。

何を考えているかわからない、そんな言葉がこれほどあてはまる男も珍しいでしょうね。得体の知れない、でも可。

「それは助かるね。でもあくまでそれは僕にとつての話だ。愛にとつては不都合が多いと思うけどそれでいいの？」

「もちろんです。人生はいつでもフェアだなんてことありはしませんから。先手を取られたといって負けたわけじゃありませんし」

何をもって勝ち負けとするかなんてわかりませんけど。

しかし、目の前の男は心にもない善意をなぜこちらに投げかけてくるのでしょうか。

ありもしない好感度を上げるための努力のつもりかな？

……いや、それこそありはしないか。彼はただ、周りに溶け込むためにその行為を『技』として身に付けたのかもしれない。

私にはない『技』だ。私には、いないものだ。

「達観してるんだね」

「アナタほどでは」

心無き、無常な言葉のキャッチボール。どちらも正確無比に相手のミットにボールを入れるが、単純作業ゆえにそこには何の楽しみも見出せない。

いわゆるお世辞です。ちょっとカッコよく言ってみただけですお気になさらず。

「そういえばさ、愛はいつも外で何をしてるの？」

「外でって……」

さも今思いついたかのようなふりをして、中々返答に困ることを聞いてくる。

私は滅多に外には出ないからどう返答したことやら。あ、二ートじゃありませんからね。こうして学校に来てるのがなによりの証拠となるでしょう。

しかし、取ったどー！！とか叫びながら田舎の山の中を走り回ることはないのも事実。

アウトドア派かインドア派どちらだと問われれば、私はインドア派を選ばざるをえないでしょうし。かわいい女の子なのです、私。嘘じゃありませんよ。

とりあえず、この質問には比較的素直に答えることにしました。

「お散歩です」明らかにインドア派じゃないけど。

「お散歩か……いいね。毎日の日課としてはとても健康的だ」

「あらあら、この二日間ほどは連続で散歩をしているようですけど、別に毎日だなんて言っていないじゃないですか。けーくんは早とちりですね」

「これは失礼。知る人ぞ知る僕の通称は『予知の景』でね。少々、先読みする癖がついてしまったんだ」

少々ムカつくドヤ顔で片目をつむりながら言ってくる水野くん。これで親指でも立てていようなら私はその指をへし折っていたでしょう。

しかしまた、すごい通称だった。わたくし、びっくりいたしましたよ。

ダウト、と言うほどのものでもありませんし、いい切り返し方はないものでしょうか。

「けどさ」

「はい？」

私が素晴らしい切り替えしを思いつく前に、水野くんが先に口を



開いてしまいました。ちくしょう。

「お散歩、いつも同じ道を通っていてさ……飽きはしないの？」

「だから、早とちりをしないでください。私はいつも同じ道を歩いてるわけでも、道を飽きるほどに散歩には出てません」

あれ、これじゃ趣味ほどのものじゃ無くなっちゃうんでしょか？  
いや趣味ってほどぼつて印象があるから、別に間違ってますよね、まる。

「それでもさ、こんな田舎町の散歩ルートなんて限りがある。あつて一個か二個、人が通らない獣道を通るなら五個ほどにはなりそうだけど。そんなところ、わざわざ行く理由がなけりゃ行かないだろうから、自然とルートは二個ほどに絞られる」

「それは否定しませんけど、だからなんだって言うんです？」

「散歩、好きなのかい？　ほんとに？　見た目と偏見から言わせてもらうと、どうしたってダイエットが必要な身体じゃない。ってことは好きで歩いているんだろ？」

「だから、そう言ってるじゃないですか……」言っただけでもしれない。

「ありえないよ、それ」

「……え？」

水野くんは、まるで道端に落ちている石を蹴るくらいの気軽さで言葉を放る。

しかし、その蹴られた石は池に落ち、大きな波紋を広げていく。

私の中の嗜虐性の泉へと、波紋を。

「人との接触を極端に嫌うキミの性格から考えて、夜に散歩に出ているんだろうけどさ、それは普通ありえないんだよ。この町に居る限り、そんなことするやつはいやしない」

「どうして、そんなことわかるんですか」

「時期が悪かったね。この町に殺人鬼が出てなったらキミの嘘はバレなかったのに」

殺人鬼。この町に突如出没した正体不明の殺人犯。

ここ一ヶ月で五人……いや、昨日で六人目が出たから合計六人の人間が殺されている大事件。

猟奇殺戮とまで言われるその犯罪は、全国ニュースにもゲストとしてお招きされていました。

で、その犯罪時刻はいつでも深夜。つまり、『普通』なら外に出るはずがない、と。

あらあら、失敗。嘘について誤魔化そうと思っていたのに、ままとボロをだしてしまいました。水野くん、意外と聡いんですね。

まあ、どうせわかってるんでしょうけど、とりあえず反論してみましようか。

「何を言うんですか。それを知ってから、私は外へ散歩になんか出てはいませんよ」

「二日ほど連続で散歩に出て、るんでしょ？」

わざわざ区切りを入れて説明してくれた。さあ困りましたよ私。

まさかこんなにも早く水野くんに攻められるなんて思ってもみませんでした。

色々と順序を吹っ飛ばして結婚を申し込まれた女子高生の気分とはこんなものなのでしょうか、とぼんやりと考えを送信した。

口では受信せず、どこか遠くへ飛んでいつてしまいましたけれど。「毎日散歩に出てはいないってのは本当だろうね。けど、キミの趣味が散歩ではなく深夜徘徊とわかった今、キミは夜にいたい何をしているのか、という疑問に転じるのは必然だ」

だから私に、声をかけた。

そうでしょうね。だいたい予想はついていました。私との会話は確信を得るための方法だったということですか。

では、今度は私の番。私の質問に、答えてくださいな。

「けーくんは、昨日の深夜一時頃、私と会った男の子ですか？」

この質問に澁みなく答えられたら水野くんは本物。けれど、少しでも答えに疑問があれば、彼の器はそこまで。

どどどっちどっちでどっちってそっちってどこだって私の疑問は

そこにある。

探して探されて魔が差して魔が差されて私を見失って私を失って過去に囚われて過去を捨てて過去を奪われて未来を手に入れたのだけれど何も手に残ってなくて嘘だ嘘だ嘘だ嘘だうそうそうそうそうっそーん！

..... はは。

さあ、私の前に居る水野くんの答えはいつたいどっち？

「違うよ」

カチリ、と。

私の中のスイッチがONになる。

ああ...この人は本物だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7431q/>

---

幸福の価値は

2011年2月20日00時42分発行